

校内研修

1 研究主題

「授業の探究」～価値あるものを自分事として学ぶ授業の創造～（8年次）

私たちの校内研修の根幹には、日常の授業をよりよくしていきたいという願いがある。授業研究だけで終わるような力の注ぎ方はしない。私たちは、これからも日常の授業をよりよくしていくという願いの実現に向け、自主性と同僚性を発揮して校内研修に取り組んでいきたいと考えている。

私たちは、子どもが、新しい時代に必要となる資質・能力を育む内容を「価値ある内容」とし、子どもが自己・教材・他者と主体的に向き合い対話を繰り返す姿を「自分事として学ぶ」と捉えてきた。しかし、「自分事として学ぶ」とは子どもの表面的な姿を表すだけではないと考える。子どもが授業の中で身に付けた見方・考え方を他の授業やそれ以外の場面で働かせたとき、その見方・考え方のよさを実感するその姿こそ子どもが自分事としている姿である。すなわち、教師は学習指導要領に示された教科内容を読み込み、単元や本時で付けたい力は何かを明確にするとともに、それまで身に付けてきた「見方・考え方」を踏まえ、その単元・その時間で身に付けさせたい「見方・考え方」も明確に捉える必要がある。

これまで私たちは子どもの学びの筋を想像して教材研究を行い、学びの筋に添って丁寧に可視化・共有化・焦点化することを大切にしてきた。子どもを信じ、子どもと共に授業を作り上げていくのが磐田北小学校の授業である。その積み重ねにより、子どもの対話は繰り返され、子どもの学びに向かう力が育ってきたと言える。学習の主体者である子どもの側に立ってじっくりと子どもの学びの筋を考えていくとともに、教師が教科の本質を学び、素材の魅力をつかめるまで教材研究をする。授業では子どもの事実を捉え、授業後にはリフレクションをすることで子どもの姿から知見を得て次の授業へつなげていく。私たちはそのような授業の探究を日々繰り返している。

2 研究課題

「学びの深まり」－子どもの対話から学びを深める教師の出（可視化、共有化、焦点化）

本校の授業を語る際に対話は欠かせないものとなった。どの教室においても子ども同士の対話する姿が見られ、子ども同士の対話の向上も見られる。本校にとって対話は当たり前であり、ただ対話をしていれば勝手に学びが深まっていくものではないということが共通理解できた。

そこで本校の課題となってくるのがその対話からどう学びを深めることができるかである。そこで重要なのが教師の居方である。学びの深めどころ（教育的瞬間）における教師の出が鍵となる。その学びの深めどころを生み出し、感じ取り、そこで即興的に振る舞う教師の出について今年度は追求していきたい。

3 研究方法

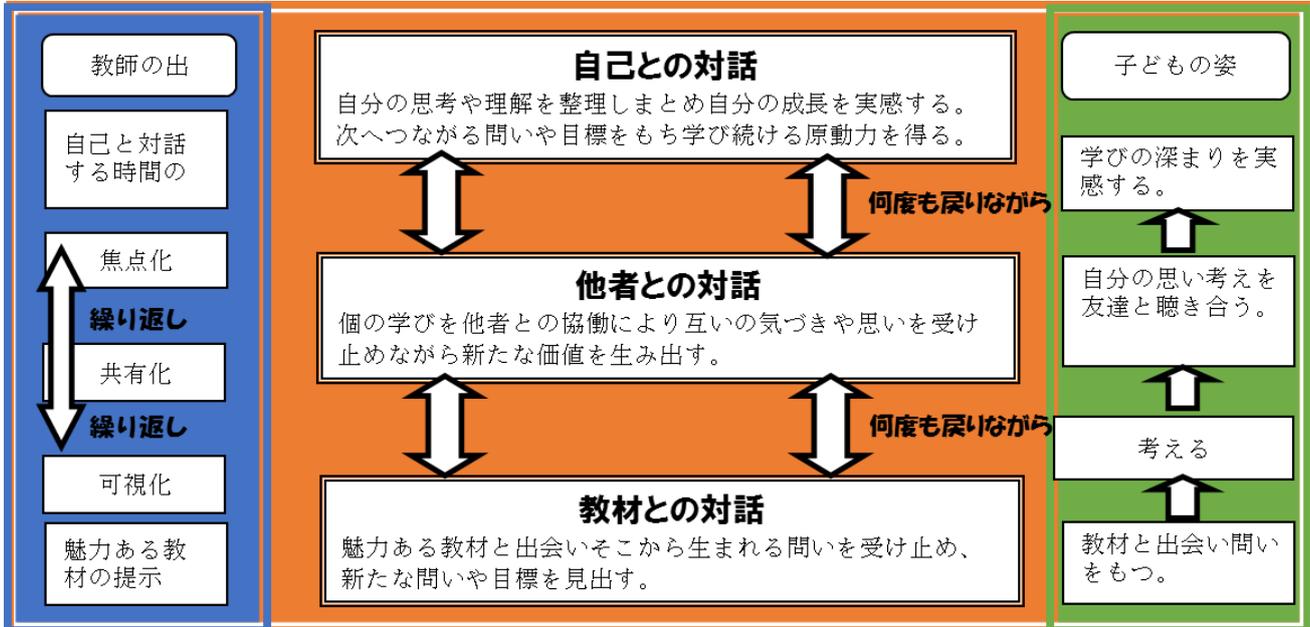
（1）子どもと共に目指す授業像をつくる。それをもとに個人テーマを設定する。

目の前の子どもと共に目指す授業像をつくる。子どもと教師が同じ方向を向くことが大切である。また、個人テーマは目指す授業像を意識したものを設定し、それを拠り所として日々の授業づくりに取り組む。

(2) 授業をデザインする力を高める。

「自分事」としての学びの場とは、素材が子どもたちにとって真の教材になる場である。デザインするという事は、様々な要素を関連させながら学びの場を構想することである。そのために、願い、目標、素材、子どもの実態、方策、学習環境を関連付けて考え、授業の全体像をつかむ。

(3) 子どもの対話から学びを深める教師の出のイメージの共有



(4) 授業研究を具体する。

ア 授業リフレクション

自分の授業について、自らの気づきを通して学ぶことが重要である。自分がとらわれていたものに気づき、目から鱗がとれた瞬間、それまでとは違ったものとして見えてくるようになるようになる。

イ 参加観察

授業の中で抽出児と同じ立場に立ち、子どもと同じ世界を共有し、子どもの目から授業がどう見えているかを観察する。

ウ 協議での多面的な「見え」の交流

参加観察者・授業者・参加者がそれぞれの立場での見え方を付き合わせて協議することで子どもの見方や授業の在り方の問題点を明らかにする。その過程で授業観が磨かれていく。

(5) 授業を再デザインする。

授業を進めていく中で、単元の導入時には見えなかった子どもの実態が明らかになれば、単元の流れや目標、次時の仕掛けを変えていく。

(6) 研究や授業への評価を得るために講師を招へいする。

新たな教育の動向を知り、確かな見通しを持って授業づくりを進める機会ととらえている。また、実践的視点から、より具体的に内容研究の在り方や指導法を学ぶために、講師を招へいし研修を深めていく。